



Title	国際開発における「第三世界」ジェンダー表象の植民地主義的意味作用に関する研究—トランスナショナルなフェミニズムの連帯に向けて—
Author(s)	近藤, 凜太郎
Citation	大阪大学, 2025, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/101606
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed 大阪大学の博士論文について https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed をご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

論文内容の要旨

氏 名 (近 藤 凜 太 朗)

論文題名

国際開発における「第三世界」ジェンダー表象の植民地主義的意味作用に関する研究
ートランスナショナルなフェミニズムの連帯に向けてー

論文内容の要旨

本研究は、「第三世界」の国際開発に関わる諸組織が「第一世界」の人びとに向けて発信する種々の広報媒体（年次報告、インターネット上の啓発資料、寄付金広告、配信動画など）に着目して、そこに描かれた様々な人物の表象を、批判的なメディア研究のアプローチによって読解するものである。具体的には、アシッドバイオレンス（硫酸などの酸性物質を顔や身体に浴びせる暴力）のサバイバー支援を担うバングラデシュのNGO、および公益財団法人プラン・インターナショナル・ジャパンという2つの団体によるネット上での広報活動を事例として、人種やジェンダーの差異を構築する植民地主義的な意味作用を明らかにする。そのうえでこの作業を、グローバル資本主義に抵抗するフェミニズムの系譜に位置づけることによって、トランスナショナルなフェミニズムの連帯に向けた示唆を引き出すことが本研究の目的である。

英語圏を中心とした批判的開発研究では、国際開発に関わる諸組織（国連機関、多国籍機関、政府系開発機関、財団、企業、NGOなど）が生み出す「第三世界」表象に注目が集まってきた。開発事業を推進するうえでは、寄付金獲得のためであれ、意識啓発のためであれ、一般市民に向けた広報が活動の重要な一角を占める。つまり、「第三世界」における開発実践（practice of development）は、ゆたかな「第一世界」の人びとに向けた表象実践（practice of representation）と不可分なのである。表象実践の産物として流通する寄付金広告や啓発資料では、支援対象となる「第三世界」の人びとの姿が写真やキャプションなどを介して反復的に呈示される。これらのイメージ群は、「第三世界」と「第一世界」を媒介する主要なメディアのひとつとして、しばしば人種やジェンダーに関するステレオタイプを組み込みながら定型的な「第三世界」像を構築する。そのイデオロギー的な意味作用は、貧困や人権侵害の背景となるグローバルな収奪構造が「第一世界」自身の手で生み出されてきたという歴史的事実を、人道主義の装いの下に覆い隠す。それによって、苦しみ舞台となる「第三世界」と、救いの手を差し伸べる「第一世界」との物質的・イデオロギー的権力関係を再生産する。本研究は、私たち自身が内面化してきた植民地主義的なまなざしへの批判的介入の試みであり、そのために、国際開発へのメディア論的アプローチともいえるべき作業を通じて、略奪的な資本主義システムがグローバルな規模で再生産される合意形成過程の一端に迫るものである。

第1章では、開発組織の表象実践を分析した先行研究の知見を整理した。「第三世界」の人びとを無力な客体として描写する「犠牲者」的表象、経済的自立や自己実現を強調する明るい「ポジティブ」な表象、2000年後半に台頭した「女の子への投資」を呼びかけるプロモーションに関する研究群をそれぞれレビューした結果、いずれの表象実践も資本主義のグローバルな収奪構造を隠蔽する意味作用を帯びてきたことが示された。しかし、英語圏の既存研究では、フェミニズム運動のNGO化の文脈や日本の国際協力の文脈には十分な関心が払われてこなかった。

第2章では、チャンドラ・モハンティの「第三世界」フェミニズムを再読する作業を通じて、本研究で行う表象分析を、トランスナショナルなフェミニズムの連帯の構想に位置づけた。モハンティにとって連帯は、西洋白人フェミニズムの「グローバル・シスターフッド」モデルとは異なり、属性や経験の同質性によって保証されるものではなく、幾重にも分断を抱えた人びとが、ジェンダー・人種・階級をめぐる思考のあり方を連繋させることによって、時間的・空間的に拡散した無数の闘争実践のあいだに生成していく「想像の共同体」を意味する。そうした生成的連帯の構想においては、植民地主義による分断線の向こう側を生きる他者の経験をいかに読み解くかという問いが不可避免的に浮上する。他者の経験を記録したテキストがいかに資本主義の市場的力学に浸潤されているかを明るみに出す作業、すなわち表象分析の作業なくして、経験を語る声に向き合うことはできないのである。

第I部（第3章～第5章）では、アシッドバイオレンスのサバイバー支援を担うAcid Survivors Foundation (ASF) というNGOの表象実践を分析対象とした。それにより、開発援助の流入によってローカルな女性運動が変質を迫られたNGO化の文脈において、いかなる「第三世界」像が構築されるのかを明らかにしようとした。

第3章では、まず、アシッドバイオレンスの実態とその社会経済的背景を整理することで、この暴力を「第三世界」

の後進的な「文化」や加害者の逸脱的人格に還元する発想の危うさを指摘した。そのうえで、ASFの年次報告書に掲載されたサバイバーのライフストーリーを分析した結果、個人的努力によって被害「回復」を遂げるポジティブな女性像と、身体損傷によるトラウマを抱え続ける「犠牲者」的女性像が、分断・序列化されていることが示された。同時に、そのポジティブな女性像は、加害者男性を人種的「他者」として放逐する表象と軌を一にしており、結果として、暴力の背景をなすグローバルな複合的諸力を不可視化するものであると論じた。

第4章では、ASFがウェブサイト上に公開する写真集の分析を通じて、グローバル資本主義と主流の開発政策の要請に応える女性サバイバー像（所得創出を通じた経済的自立、核家族の下での母親業、農村の家族計画）と、それを支援する善良な「第一世界」（科学的合理性や強靱な身体をもつ男性像、情緒的承認を与えるセレブリティ女性）から成る新たな植民地主義的關係が、ジェンダー規範を組み込みながら成立していることを示した。

第5章では、同じ写真集に登場するひとりの女性アクティヴィストの表象に焦点を絞って詳細な分析を展開した。その表象は、暴力に抗議する主体性を描く点でフェミニズムと親和的ではあるが、それは同時に、地道な活動を続けてきたローカルな運動の消去、ならびに「第一世界」ドナー機関や医療技術の効能への過大評価に裏打ちされたものでもあった。結果として図らずも、世界的なイスラームフォビアの趨勢を背景とする「ヴェール」のステレオタイプと節合される素地が生じていることを明らかにした。

第Ⅱ部（第6章～第8章）では、プラン・インターナショナル・ジャパン（以下、プラン）によるネット上の広報活動を事例として、日本社会に流通するジェンダー化された「第三世界」像の意味作用を探った。その際、ポストフェミニズムをめぐる議論を補助線にして、配信プラットフォーム上でのオーディエンスの視聴傾向や解釈行為をふまえながら、「第三世界」のイメージを媒介とした日本社会の自己像の構築過程を明らかにしようとした。

第6章では、プランが制作したYouTube CMの分析を通じて、それらのCMが、家父長制を想像上の「第三世界」空間へと転位することで、日本に内在する深刻な家父長制の現実から視線を逸らし、ポストフェミニズム状況を強化していることを示した。同時に、英語圏では若い女性どうしの水平的なシスターフッドや経済的・性的自由が前景化するのに対して、日本では明らかにそれと異質なプロモーションがなされている点を指摘し、そのことをポストフェミニズムの日本的文脈と結びつけて論じた。

第7章では、プランが運営するYouTube チャンネルに投稿された動画群を分析した。分析を通じて、再生回数の多い動画群が、「第三世界」の女性抑圧を後進的な「伝統」や「文化」に回収する＜病理化＞言説、ならびに外部から解決策をもちこむ＜処方箋＞言説という、定型的なパターンを反復していることを明らかにした。また、紛争や食糧危機や感染症といった人道危機的事象と比較して、女性・女子のセクシュアリティに対する脅威を連想させるエキゾチックな事象に消費傾向が偏っていることから、＜病理化・処方箋＞の言説パターンは、送り手の広報戦略のみならず、オーディエンスの共犯を通じて増幅されている可能性を指摘した。

第8章では、プランのYouTube動画に寄せられたコメント群を対象にして、配信プラットフォーム上に表明されるオーディエンスの解釈行為を分析した。コメント欄の視聴者たちは、「第三世界」の非合理的な「伝統」「文化」「風習」を非難したり、明白な差別語を用いてローカル共同体を嘲笑したりなど、それぞれ独自のしかたで＜病理化＞言説を強化していた。日本の主体位置は「第三世界」よりも序列の上位におかれ、明確に「第一世界」の側に同一化されていた。とはいえ、レイシズムやセクシズムにもとづく差別発言が飛び交うなかでも、少数ながら抵抗や対話の実践が観察され、それらを、日本社会を拠点とするフェミニズムの連帯の萌芽と位置づけた。

終章では、以上の各章で得られた知見を要約し、本研究の学術的貢献を述べたうえで、グローバル資本主義時代に流通する「第三世界」ジェンダー表象の特徴を、近代植民地主義の＜野蛮／文明＞イデオロギーと関連づけながら整理した。21世紀に流通する「第三世界」イメージは、一見すると、近代植民地主義の思考図式を脱却しているようにもみえる。フェミニズム由来の言語でコーティングされているぶん、その表象空間に＜野蛮／文明＞イデオロギーの影を見出すことは難しい。しかし、近代植民地主義のエッセンスは、その内実を複雑に変容させながらも、二項対立的世界観としていまなお確実に尾を引いている。グローバル資本主義は、みずからの安定性を脅かさない限りにおいて、あらゆる女性に＜進歩＞の資格を付与しつつ、フレキシブルに資本蓄積の原動力として組み込む。もしも「第三世界」にまなざしを注ぐ私たちが、女性（と男性）をフレキシブルに分断する新しい表象のイデオロギーの意味作用に無自覚なまま、「エンパワー」される女性の＜進歩＞をフェミニストの主体形成の証として称揚するならば、「第三世界」女性との構造的な分断をさらに深刻化させることにもなりかねない。このようにフェミニズムさえも選別的に流用して自らの養分としてしまう国際開発のフレキシブルな性格を見抜き、根底から批判するためにこそ、反レイシズム的・反植民地主義的・反資本主義的なフェミニズムの連帯が不可欠であると結論づけた。

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 (近 藤 凜 太 朗)			
	(職)	氏 名	
論文審査担当者	主 査	教授	木村 涼子
	副 査	教授	北山 夕華
	副 査	教授	岡部 美香

論文審査の結果の要旨

本論文は、国際開発・開発援助の文脈において、支援の対象となる「第三世界」の女性・男性・子どもたちがどのように表象されているのか、トランスナショナルなフェミニズムの視点から、その植民地主義的意味作用を解き明かそうとしている。本論文は、序章から第2章までの理論編、第3章から第8章まで二つのパートに分かれた実証編および終章という構成の、大部の論文となっているが、各章の目的が明確かつ全体として各章のつながりや流れの整合性がとれており、理論と実証のいずれも高い水準の労作となっている。

序章では、グローバル社会において重要な位置を占める国際開発の取り組みを、スチュアート・ホールやロラン・バルト等のメディア理論・記号論を用いながら解説するという研究目的を呈示するとともに、補論1で「第三世界」という概念を用いる意味を明確にし、本研究の独自性を示している。続く第1章で先行研究を俯瞰した上で、第2章は「第三世界」フェミニズムの代表的な論者であるチャンドラ・モハンティを中心に関連の諸理論を整理している。グローバルな文脈に比べて日本ではまだ十分に知られているとはいえない、チャンドラ・モハンティを中心とする「第三世界」フェミニズム、トランスナショナル・フェミニズム、連帯論などを詳しく論じながら、過去の植民地支配や戦争の歴史を背景とした日本とアジアの現在の国際関係を鑑みつつ、日本でモハンティの議論を取り上げる意義を説得的に論じている点も、本論文のオリジナリティの一つである。

この、序章・第1章・第2章と二つの補論からなる理論編については、国内外の研究および20世紀後半から21世紀にかけてのフェミニズム・反植民地主義に関する代表的な議論や、メディア研究における批判的アプローチ、ポストモダン理論に幅広く目配りをしていること、それらの理論が丁寧に整理されていること、従来の研究を踏まえた上で本論文での各種の概念定義が精緻になされていることなど、高く評価できるものであり、本論文がグローバルなジェンダー研究・メディア研究の最前線に接続していることを感じさせる。

実証編・第1部では、バングラデッシュの「アシッドバイオレンス」（酸性物質を用いた暴力）を事例に、サバイバー支援のローカルな女性運動が国際的なNGOに「変質」していくプロセスの解明と、NGOが発信する言説および写真などの表象の分析をおこなっている。サバイバーのライフストーリー、サバイバー支援に関わる写真集などを分析した結果、それらの意味世界では、外見や身体機能に損傷を受けた「犠牲者」的女性と、「第一世界」の援助を受けながら学習や就業などの個人的努力によって「回復」していく女性、後者を支える「第一世界」の著名女性や専門家男性、「犠牲者」を生む暴力を振るう「第三世界」（／イスラム）の野蛮な男性という、単純化・ステレオタイプ化された対比と序列が浮かび上がってくると分析する。それは結局のところ、現在のグローバル資本主義の下での植民地主義イデオロギーの再生産だとの考察も明快である。支援—被支援の関係においては支援する側にある日本社会の論理を用いて、被支援側の運動団体が発する表象を一方的に分析するという、まさに植民地主義的になりかねない構図のテーマであるにもかかわらず、そうした構図をこそ批判的にとらえようとする問題意識をもとに慎重に議論が展開され、考察が深められている。

実証編・第2部では日本の国際協力NGOが日本社会に対して支援を呼びかける際のネット上の広報活動を取り上げ、ジェンダーおよび植民地主義的な権力関係を読み解く視点からクリティカルな分析をおこなっている。ここでメディア研究で課題となりがちなおオーディエンス研究にも取り組んでいることは注目に値する。NGOが発信する動画の視聴動向分析やYouTube上の動画へのコメント分析からは、女兒の身体やセクシュアリティに対する脅威（たとえば児童婚、FGM/C、人身売買）に人々の関心が高いこと、「第三世界」の女兒が被る抑圧や暴力のアピール

は、翻って「日本社会は平等で平和だ」との認識にすり替わり、国内の問題を不可視化する機能を果たすとの結論が説得的に導かれる。近年の開発支援の流れでは社会的正義であると同時に経済合理性もある施策として「女の子への（教育）投資」が強力なスローガンとなっており、日本社会でも肯定的にとらえる傾向があるが、そうしたジェンダー平等論が大きな陥穽に陥る危険性の指摘も示唆的である。

実証編は第1部も第2部も、分析対象が置かれている社会的・政治的文脈や、それぞれの歴史的経緯が丁寧に踏まえられ、分析を地に足のついたものになっている点も評価できる。

終章では得られた知見を整理した上で、国境やポスト植民地主義的な関係性の拘束を越えて女性たちが（そして男性も）いかに連帯できるのかを、グローバルのみならず日本社会固有の状況にも目を向けながらより深く考察している。意欲的でありながら、空中戦的な議論に終わってしまうことなく、実践的課題にも結び付くようなインプリケーションが示されている点も、本論文の大きな特長といえよう。

メディア研究の領域でも、ジェンダーやポストコロニアリズム研究の領域でも学術的貢献が高い水準で期待できる論文だと評価できる。以上のことから、本論文は博士（人間科学）の授与にふさわしい内容を備えていると判断した。